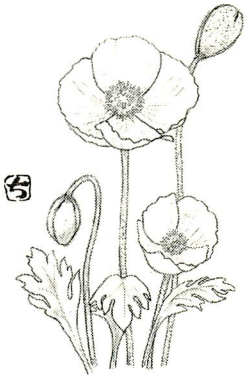
みめぐみの

第27部

みめぐみの

第27部



大谷光道著

目次

お釈迦様は？（その三）……2
思い出してほしい歌……2
海と船……4
再び『二河白道』……9
持って行けるものは？……15
一石二鳥……21
また別の「共同作業」……22
このシリーズの終わりに……24
読者の頁……29
あとがき……31

お釈迦様は？（その三）

『お釈迦様は？』も、今回で三回目です。

浄土真宗では阿弥陀様のお話が中心でお釈迦様が一向にお出ましにならないことから、「浄土真宗ははたして仏教なのか」というご質問が出て、この『お釈迦様は？』のシリーズを始めました。前二回で、浄土真宗におけるお釈迦様の存在の大きさが次第に明らかになってきたと思います。今回は二河白道の意味をもう少し探りながら、さらにお話を進めましょう。

思い出してほしい歌

以前、『汽車ポッポ』の歌のお話（『第二部』参照）をしたことを思い出して、「前から『一心に念じてすぐに渡って来い。私が護ってやる』と呼び寄せてくださる阿弥陀様、後ろから『心を決めてこの道を尋ねて行け』と後押ししてくださるお釈迦様」という二河白道のイメージと重ねてみてください。

前に進むためには何らの装置をも備えていないただの箱に過ぎない客車（旅人、凡夫）を、前の機関車（阿弥陀様）が引っ張ってくれて、

汽車ポッポ

お山の中ゆく
　　汽車ポッポ
ポッポ　ポッポ
　　黒いけむを出し
シュシュシュシュ
　　白いゆげ吹いて
機関車と機関車が
　　前引き　あと押し
なんだ坂
　　こんな坂
……
トントン　トンと
　　のぼりゆく

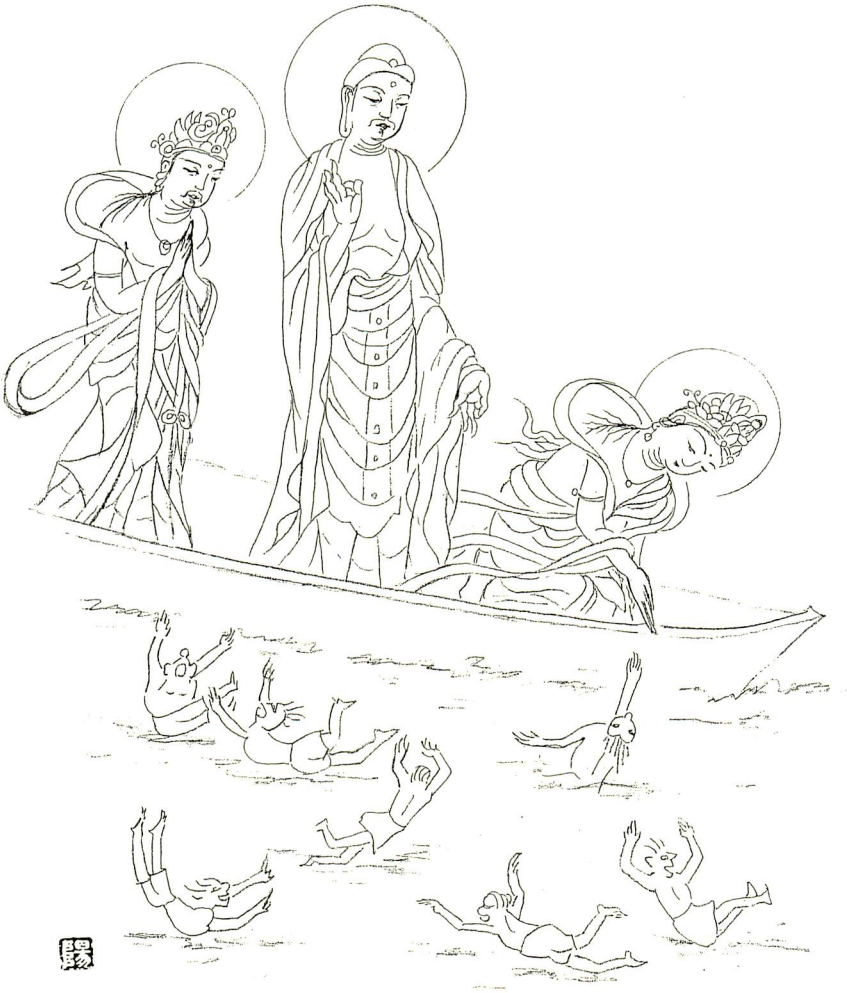
後ろの機関車（お釈迦様）が押してくれる、そしてどんな坂道をも物ともせず山の上まで運んで行ってくれるのです。

この『汽車ポッポ』の歌には、二河白道にある火や水の河にあたるものがなかったり悪獣がいなかったり、足りないものがあるのはともかく、阿弥陀様とお釈迦様に護られる凡夫について考える上で、多少なりとも役立ったのではないでしょうか。

海と船

お釈迦様の見える形での登場がないのでお釈迦様と阿弥陀様お二方の共同作業とは言えませんが、私たちが阿弥陀様のご本願に助けられるイメージとして「海と船」がよく出てくるので、ここでそのいくつかを味わってみましょう。それは阿弥陀様の本願力と凡夫の拙い姿を映し出すのに、まことに相応しい景色です。

お釈迦様は？（その三）



生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓（ぐぜい）のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

迷いの苦海はどこまで行っても岸にたどり着くことはない。
この苦海で浮きつ沈みつしている私たちを
弥陀の本願の船だけは
私たちを乗せて必ず覚りの岸まで渡してくださるのだなあ。

（『高僧和讃』）

弥陀・観音・大勢至
大願のふねに乗じてぞ
生死のうみにうかみつつ
有情をよばうてのせたまふ

弥陀・観音・勢至の三尊は
本願の船に乗って
迷いの海に浮かびながら
衆生を大声で呼び寄せて乗せてくださる。

（『正像末和讃』）

註：弥陀・観音・大勢至＝弥陀三尊。観音＝観世音菩薩、阿弥陀如来の右の脇士、慈悲を司る。大勢至＝勢至菩薩、阿弥陀如来の左の脇士、智慧を司る。

無明長夜の燈炬（とうこ）なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏（せんばつ）なり
罪障おもしとなげかざれ

弥陀の本願は煩悩による長い夜を照らす燈火（ともしび）・たいまつであるから

真理を観る智慧の目が暗いと言って悲しむことはない。
弥陀の本願力は迷いの大海を行く船・筏であるから
罪障（悪い行いによる覚りへの障害）が重いと言って歎くことはない。
（『高僧和讃』）

さらに親鸞聖人の代表的御撰述である『教行信証』の序文も、このイメージの構成で始まります。

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍（むげ）の光明は無明の闇を破する慧日なり。

こっそりと思いめぐらすに、凡夫の知恵の及ばない弥陀の本願は渡ることの難しい海（迷いの世界）をも渡す大船、何者にも遮られることのない弥陀の光明は無明の闇を破る太陽のようである。

この一節は、大部の『教行信証』の中で、聖人の信仰のお心持ちをひと言に凝縮されたお言葉ではないかと窺（うかが）えます。

再び『二河白道』

さて、ここでもう一度二河白道の情景を思い出してください。

西に向かう旅人の右前方には水の河、左前方には火の河。目の前にまっすぐに続く細くて白い道。そして水と火の河を境として、世界が区切られています。河のこちら側・東岸は「現世」、私たちの毎日生活する「この世」で、娑婆(sahā)とも言います。これに対して、二つの河の向こう側・西岸は「来世」で、その

毎月二十八日のお講

中でも最もすばらしい国・極楽浄土です。阿弥陀様の国です。後ろからは賊たちや悪獣が旅人を殺そうと迫ってきています。

旅人はこの河の手前まで来て、戻っても死、留まっても死、進んでも死、といういずれを選択しても必ず死ぬという状況に置かれています。「この白い細い道をうまく渡ることが出来たら生き延びられるかも知れないが、失敗すれば死ぬ。しかしそれ以外に生き延びる可能性はない」という、一か八かの決断を迫られています。追い詰められないと心が決まらないのは、やはり凡夫の常なのでしょう。

水の河に墜ちるということは、貪欲（とんよく）の煩悩（貪りの連鎖に振り回され悩まされる）にどぼっと漬かり、さらに溺れ死ぬということです。火の河に墜ちるとは瞋恚（しんに）の煩悩（怒り・憎しみ・怨（うら）みの感情に振り回され悩まされる）に焼き殺されることです。悪獣に食われるとは、正しい信仰を邪魔したり別の間違った教えや修行を勧める人の言うことを聞いてついていく、ということ

です。

わざわざ説明するまでもないことですが、もちろんこれらはいずれも物理的に殺されたり死んだりするという意味での死ではありません。人間に生まれて仏法に遇えるという幸せをもらっているのに、そのチャンスを自ら放棄してしまうことを指しているのです。正しい教えに触れたり自らそれを深めようとしないで終わることは無駄死にであり、それはそのまま無駄生きであると教えられているのです。

生きることの本当の幸福が目の前に見えているのに、そこから目を背けようとしているのだと気づかねばなりません。煩悩の河に墜ちたりすることが死ぬことであると言えば一見大げさなようですが、以上のように考えてくると決してそうではないことがわかってきます。形の上では生きているように見えていても仏法に近づかないのであれば、それは生ける屍に過ぎないと教えられているのです。信心を持つというのは心にしっかりとした正しい芯を

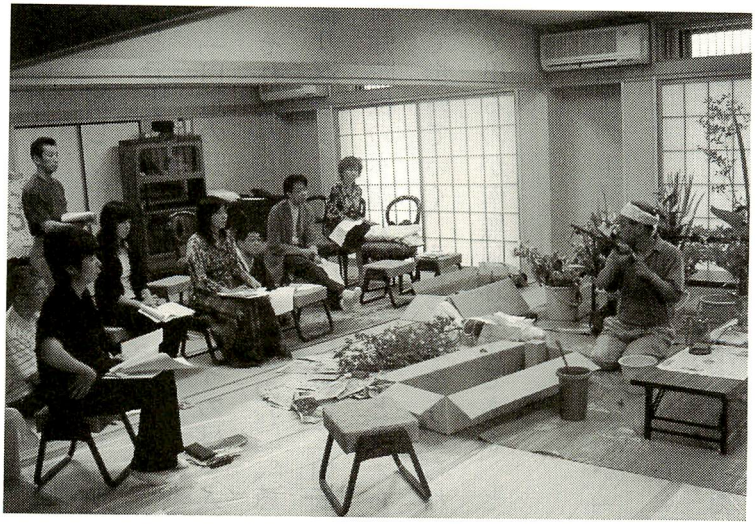
持つことで、それが真の幸福であるということです。

この旅人のように、追い詰められている己の現実の姿に気づいて、唯一の生である白道一つを頼りとして歩いていく決断をするのが、「信心決定（けつじょう）」です。そして、「やがて極楽に往生できる」という安心感から口をついて出るのが、「南無阿弥陀仏」なのです。このときを境に、阿弥陀様に少しでも御恩報謝をしたいという気持から南無阿弥陀仏を口にする生活が始まります。いま「南無阿弥陀仏が口をついて出る」と言ったのは、私が称えようとして称えるのではなく、まさに他力のお念仏だからです。

心を決めて白道を歩いて行く、この「決定」が、実は浄土真宗の最も重要な課題なのです。それは、私たちは信心をいただく（信心獲得）ことによって、極楽に往生して成仏（覚りを開く）できることが決まり、それを達成させてくださる阿弥陀様への報謝の念にあふれた他力念仏の生活が始まるので、この信心決定によって浄土真宗で最大の宗教的目的が達成できたことになる

からです。

信心決定はいずれ極楽に行って成仏するための切符ではありますが、決して今はまだ覚りを開いたわけではありません。入学試験に合格してもそれは○○大学の入学資格を得たのであって、まだ○○大学の学生ではないし大学生の学力ももちろんありません。これのようなものです。覚りを開いたわけではないのですから、煩悩はなくなるわけではありません。やはり以前と同じように欲も起こり腹も立ちます。欲が起こるの



「形にこだわらないで…」と神戸慈光院華房住職による立華（仏花）の指導。

は水の河の波が白道を洗う姿で、腹が立つのは火の河の炎が白道をなめている姿です。しかし以前との大きな違いは、新しく現れた白道というしっかりした道の上に体が乗っているということです。

親鸞聖人は白道を歩む人生について「白道の長さが百歩というのは、人間の寿命がせいぜいで百歳だとして、それにたとえられているのだ」(『愚禿鈔』)と、お教えくださっています。繰り返しますが、この世において煩悩はそのままでありながら、白道という阿弥陀様の本願力にしっかりと支えられて、確実にいつもお浄土のほうを向いて歩いていく、そして道を与えられたことへの感謝のあまり、私の口をついて出るのが南無阿弥陀仏である、ということです。

私たちの心の中に芽生えた白道を歩く念仏の生活こそが、前号で私が「非日常の生活」とお話ししたものなのです。一方、白道を持たず、私たちを取り巻く日常の「雑事」にまみれているだけの生活であれば、糸の切れた凧の

ようなものだと言わなければなりません。

持って行けるものは？

二河白道の旅人は、やはり私のこととしてとらえなければ意味がありません。

しかしどうしても「二河白道は二河白道」「旅人は旅人」で、お話の中の他人事として片付けてしまいがちで、なかなか私の問題になってきません。そこで、こんな話を思い出しました。真偽のほどはともかく、

前住（闡如）上人十三回忌法要

以前読んだユダヤ人のことを書いた本にあった話です。

ユダヤ人は太古より他民族から迫害を受けてきた。それで、たとえば子供の教育一つをとってみても、我々には考え及ばないことがある。親が子供を暖炉の上の台に乗せて「そこから飛び降りてごらん」と言って手をさしのべる。そこでいざ子供が飛び降りると、出した手を引っ込める。当然のことながら、子供は下に落ちて泣く。これは「親たりといえども、人を信じてはならない」と教えるのだ。信じられるのは自分自身と、どんなときでも持っていれば困らないお金、それもキャッシュだけだと教えるのである。

ある時、ユダヤ人の中でも特にキャッシュの好きなあるお金持ちが亡くなった。家人は棺にぎっしりと彼の大切にしていたキャッシュを入れてあげた。お悔やみに来たユダヤ人の友人が家族に「これ、いくらある？」と聞き、その金額を小切手に書き入れ棺に入れ、代わりにキャッシュを全部

持って帰った。

という話です。

「何ともえげつない」話です。しかし亡くなったご本人からするとさらにそれどころではなく、小切手はもちろんお金すらも無縁のものとなってしまったのです。

『お文』（蓮如上人）にもまた同じことが書いてあります。

たのみおきつる妻子も財宝も、わが身にはひとつもあひそふことあるべからず。……

この世での大切な人も物も、命が終わるとそのすべてをなくし、あの世に持って行けるものは何一つありません。そんなことは、ユダヤ人のこの話や『お文』によらなくてもわかりきったことです。しかし何かの機会にそれに気づかされない限り、私たちは健康で何も心配のないときはこのようなことは全く頭にありません。

また、こんなのがあります。タイタニック号の映画が、先頃までディカプリオの人気が手伝って大もてでした。

船が沈みそうになったとき、主人公の婚約者で大金持ちの青年が、女・子供の優先がルールであるにもかかわらず、それより先に自分が救命ボートに乗ろうと、ボートの係に賄賂的に札束を渡すシーンがありました。しかし、船が危なくなるにしたがって札束の効き目がどんどんなくなっていき、やがて誰も相手にさえしてくれなくなります。

このようなシーンは何もタイタニック号に限ったものではありません。しかし、いざ自分が危機に直面したり真剣にいろいろなことを想定して思い回らさない限りふだんは忘れていて、「お金さえあれば私の命は脅かされない」との錯覚を持っています。

そしていざ自分が危機に直面しても、他人からは「持って死ねる訳じゃあるまいに……」と冷たく片付けられてしまうのが落ちで、この世にいるとき

には値打ちのあったもの全てが死出の旅路には何の役にも立たないものになるという厳しい現実に、いずれ直面することになります。

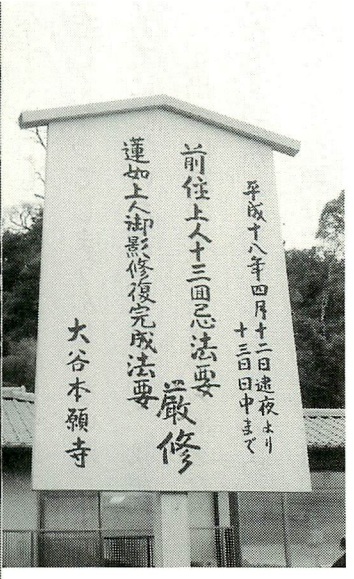
そこで、この『お文』を意訳してみましょう。（本文は末尾）

よくよく考えてみると、人間はいなずまや朝つゆのようにはかなく、ゆめまぼろしのような間の楽しみであるよ。はなはだしく派手でぜいたくな生活に耽って、思い通りのことをしているといっても、それはただ五十年ないし百年の間のことである。もし今すぐにでも無常の風が吹いて来て誘われてしまえば、何かの病苦に遭って空しくなってしまうんじゃないか。まことに死ぬであろうときは、予てからあてにしていた妻子も財宝も、我が身には一つも付き従わないだろう。だから死出の山路の末、三途の大河をただ一人で行くことになるだろう。こういうことだから（そうならないために）、ただ深く願うべきは後生（来世）である。また頼りにすべきは阿弥陀如来である。

信心決定してたどり着くべきところは極楽浄土であると、きっと思うはずだ。

――中略――

だから今日からは、他力の信心の由来をよく知っている人に尋ねて、信心決定して、その信心の味わいを弟子にも教えて、一緒に、やがて来たるべきもっとも大切な往生を間違いなく遂げるべきものである。あなかしこ　あなかしこ



完成した蓮如上人御影

文明五年九月中旬

「持って死ねるわけではない」のは、どこからどう考えてみても、動かすことの出来ない真理です。これを我が事として受け止めることから、私たちの宗教生活が始まります。

一石二鳥

私たちは「信心決定」によって、煩悩にまみれた己の真の姿を観ることが出来、安心感の中で充実した明るい他力念仏の生活を始めることが出来ます。そしてひとたび無常の風が吹いたら、極楽に往生して成仏させていただくというご利益もこの身に具わるのです。浄土真宗は、往生成仏という、この世の命が終わってからの安心に重きを置くと同時に、その安心をテコ・バネにして、それがそのまま〝今〟の安心を生み出す教えです。

したがって、この教えによって得られた他力の信心は、「キャッシュと違って、現世と来世に亘る、その両方に通じる、キャッシュ以上の宝物」なのです。言い換えれば、この念仏の信心という宝物は「持って死ねるもの」、いや「持って行かねばならぬもの」そして「今も持っていなければ生きられぬもの」です。

また別の「共同作業」

二河白道とは別の、この「共同作業」を忘れることは出来ません。

『仏説観無量寿経』（『観経』）の定善（じょうぜん）のお話（『第五部』）をしたのを思い出してください。『観経』は、王舎城（おうしゃじょう）（ラージャグリハ。古代インドで強大であったマガダ国の首都の名。現在はラージギール）でのお釈迦様の説法を書き記したお経です。凡夫の代表としてこのお経の導入部に登場する悲劇の主人公・韋提希夫人（いだいけぶにん）は、自分の力では阿弥陀様を観ることが出来ないので、

お釈迦様のお力で阿弥陀様を拝ませていただいたのがありましたね。

これも阿弥陀様とお釈迦様の「共同作業」で、しかもこれは譬喩ではなく実話です。この定善の説法の中程で突然阿弥陀様と観音・勢至二菩薩が空中にお姿を現されます。その光明は眩しくてつぶさに見ることが出来ないほどであったと記されています。

これは、お釈迦様が、

あきらかに聴け、あきらかに聴け。よくこれを思念せよ。仏、まさになんぢがために苦悩を除く法を分別し解説すべし。なんぢら憶持（おくぢ）して、広く大衆のために分別し解説すべし。（『観経』）

よく聞くがよい。これから汝らのために、世の苦しみを除く方法を説こう。これをよく心にとどめ、広く説き広めよ。

と、切り出されると同時に起こったことでした。

「苦悩を除く法」というまことに大切な、聞き逃すことの出来ないご説法

が始まると同時に阿弥陀様が出現されたわけで、このお釈迦様と阿弥陀様の絶妙の呼吸を善導大師は、

娑婆の化主、物の為の故に想を西方に住せしめ、安楽の慈尊、情を知るが故に則ち東域に影臨したまふことを明かす。斯乃ち二尊の許応異なること無し。（『定善義』）

お釈迦様は人々を救うために想いを極楽に傾けさせ、阿弥陀様は事情を知ってこの世にお姿を現されたことを（観経は）明らかにしている。韋提希夫人の求めた「苦悩を除く法」の答えは、まさに阿弥陀仏そのものであるということを、お二方で示されたのである。

と注釈されています。

この「共同作業」は格別中の格別と言わなければなりません。

このシリーズの終わりに

「浄土真宗ははたして仏教なのか」と聞かれて、「そんな、当たり前のことをなぜ聞くの？」と喉元までは出たものの、「待てよ、何と説明しようか」と戸惑いました。当たり前のことほどいざとなると説明しにくいもので、真正面から聞かれると慌てるものです。

この当たり前を説明するのに三部にも亘ってページを費やしてきたことを今顧みながら、お陰で私もいい勉強をさせていただいたと、しみじみ感じ入っているところです。

このシリーズを終わる今頃になって、こんなことを思いつきました。

「お釈迦様はカメラマンなのだ。ナレーターなのだ。阿弥陀様とそのお浄土、本願……についてその景色を映し出し私たちに見せて、さらに解説してくださっているのだ。」と。こう考えると、お釈迦様が説法の中にお出ましになる割合が少ないのも納得できてくるというものです。

たとえば、高い鉄塔やそそり立つ絶壁を登るような場面をテレビなどで見

ていると、背筋が緊張し脚の力が抜けるような思いがします。そこでふと「もっと怖い思いをして、これを撮っている人がいるのだ。」と気づくと、もうどうしようもなくなることがあります。そう、お釈迦様は、カメラマンだったのです。

「カメラマンが写真に写っていないのは当たり前、語り手が物語の中に顔を出さないのは当たり前」です。

〈完〉

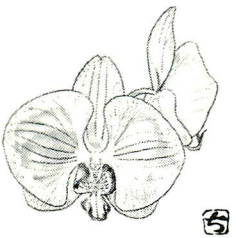
『お文』一帖目　第十一通

それおもんみれば、人間はただ電光朝露の夢幻のあひだのたのしみぞかし。たとひまた栄華栄耀にふけりて、おもふさまのことなりといふとも、それはただ五十年乃至百年のうちのことなり。もしただいまも無常の風きたりてさ

そひなば、いかなる病苦にあひてかむなしくなりなんや。まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も、わが身にはひとつもあひそふことあるべからず。されば死出の山路のすゑ、三塗（さんず）の大河をばただひとりこそゆきなんずれ。これによりて、ただふかくねがふべきは後生なり、またたのむべきは弥陀如来なり。信心決定してまゐるべきは安養の浄土なりとおもふべきなり。これについてちかごろは、この方の念仏者の坊主達、仏法の次第もつてのほか相違す。そのゆゑは、門徒のかたよりものをとるをよき弟子といひ、これを信心のひとといへり。これおほきなるあやまりなり。また弟子は坊主にものをだにもおほくまゐらせば、わがちからかなはずとも、坊主のちからにてたすかるべきやうにおもへり。これもあやまりなり。かくのごとく坊主と門徒のあひだにおいて、さらに当流の信心のこころえの分はひとつもなし。まことにあさましや。師・弟子ともに極楽には往生せずして、むなしく地獄におちんことは疑なし。なげきてもなほあまりあり、かなしみても

なほふかくかなしむべし。しかれば今日よりのちは、他力の大信心の次第をよく存知したらんひとにあひたづねて、信心決定して、その信心のおもむきを弟子にもをしへて、もろともに今度の一大事の往生をよくよくとぐべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

文明五年九月中旬



読者の頁

感想 意見

二十六部によせて

東京都武蔵野市　鈴木　健太郎さん

二河白道と三定死（さんじょうし）について以前聞いたことがありましたが、善導大師が説かれたことだと今回初めて知りました。

今回写真が多く、新天地でのご活動が本格化しているご様子がよくわかります。中でも大谷楽苑コーラスの御再開おめでとうございます。

《編集部註》

三定死＝二河白道の譬喩において「戻っても死、留まっても死、進んでも死」という旅人がおかれている立場のこと。

島根県江津市　大谷　瑩俊さん

いつも拝見しておりますが一般人に真に納得出来ます法話をお述べになっております事にいつも懐深く拝読しております。又、私も若い頃より声明作法に厳しくしてきましたが、猊下も殊のほかご関心とあり厳しくご指導のご様子を中外日報等で知りまして嬉しい限りと存じます。猊下以外にはもう大谷派の声明作法をお伝え頂く方はおられません故、今後共益々のご指導を願いあげます。

《筆者註》

大谷瑩俊さんは、いつも本誌に親しんでくださり、二十五部では感想を寄せてくださいましたが、去る六月二十二日、八十八歳でご逝去になりました。ここに誌上を借りてご生前のご厚誼に深謝すると共に謹んでお悔やみ申し上げます。

合掌

あとがき

みめぐみの刊行委員会

三回、約一年にわたって進めて頂いた「お釈迦様は？」シリーズもいよいよ完結となりました。これを機会にもう一度さかのぼって第二十五部から通読してみるのもよいのではないでしょうか。

今回は浄土真宗の最も重要な課題として「信心決定」「信心獲得」のお話にまで言及されました。また、最後に「お釈迦様はカメラマンなのだ。」とむすばれましたが、全てを読み終えて光道台下自身もやはり「カメラマンである」と気付かれた読者も多いのではないでしょうか。常に角度を変えたり、背景に工夫を凝らしたりしながら写し撮って下さる台下の「写真」を真直ぐな視線で見つめ理解して行きたいものです。

毎月二十八日にはどなたでも参加していただけるお講が開かれています。「みめぐみの」バックナンバーの解説などもされていますので、ぜひ一度ご参加下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい
※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円
○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です
※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円
○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの　第27部

2006年7月5日　印刷
2006年7月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道
発　行　みめぐみの刊行委員会
〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990
印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊